

文字もじMOJIの世界

18. 信州松本から発信するタイポグラフィ

白木隆士*

松本タイポグラフィ研究会 発足の動機

文化の発火点となり、多くの情報を伝えてきた出版と印刷。そこに欠かせないのが日本語のタイポグラフィだ。

日本語の表記には縦組も横組もあり、漢字と平仮名・片仮名が混在する（加えてアルファベットやアラビア数字も混在する）。このように複雑な日本語の情報を正確に伝えるためには、読みやすく且つ美しい紙面をつくるのが大切であり、それには日本語タイポグラフィのノウハウが必須となる。

このノウハウは長年にわたり蓄積・研鑽されてきた。しかし近年、

コンピュータの普及にともない、かつては出版社や印刷会社などの一部のプロだけが担ってきた作業を誰もができるようになったことで、その重要性が意識されにくくなってきている一方で、紙媒体にとどまらず Web サイトなどの電子媒体でも必要とされる場面が増えている。

そこで、このノウハウを情報発信者である書き手、デザイナーなどの作り手、読み手の三者で共有・継承し、より良質な活字文化を、ときに松本という地方都市独特の気風と混在させながら発信することを目指して発足したのが、「松本タイポグラフィ研究会」である。

長野県松本市で、活字デザインやその適切な選択・配置・組版などデザイン表現全般を学ぶことを目的に、有志数名で2017年初冬に発足した。研究会のメンバーは地元印刷会社のDTPオペレーターやデザイナーを中心に構成されており、それぞれが仕事を終えた平日の夕方や休日に活動をおこなっている。

松本タイポグラフィセミナー 「書物と活字」シリーズ 活字・組版・デザインを学ぶ

研究会の活動の第1弾として、「書物と活字」シリーズと題したセミナーを開催した（2018年は全3回）。

東京、大阪、名古屋などの大都市には多くの人が集まり、比較的規模の大きな勉強会やワークショップが数多く開催されるが、松本市のような地方都市ではそのような機会が限られており、大きな情報格差があると言える。このような状況を打破し、地方でも都市圏と同等のレベルで文字やデザイン、タイポグラフィについて学ぶ機会を設ける目的で、今回のセミナーシリーズは企画された。

一回毎の参加費をできるだけ低く設定することで参加者が継続して学び、成長できる環境をつくり、松本市とその近郊を中心に、知識と技術の還元・浸透を高め、さら



写真1 第2回 松本タイポグラフィセミナーの様子

にはセミナーを通して得た知識や技術が、地域のものづくりや発信する活字文化の品質向上に繋がっていくことを目指している。

2018年3月、第1回

「おいしい文字のチカラ」

第1回セミナー講師には、「文字の食卓」⁽¹⁾ 主宰で、独自の書体評論で文字の面白さ、奥深さを伝えている文筆家の正木香子さんを迎えた。

セミナーで正木さんは、マンガや文学作品などに使われている書体を例に、書体の違いにより読み手の感じ方が違ってくことなど、書き手のおもいに読み手が共感をもつために適切な書体を選択することの必要性を語った。

この日は、正木さんの講演に加え、第2回セミナー講師に決まっていた鳥海修さんと、その鳥海さんが主宰する「文字塾」⁽²⁾ の塾生10名も来場し、東京人形町のギャラリー「ヴィジョンズ」で展示^{(3),(4)} を予定していた各自の作品について、コンセプトや制作過程を発表していただいた。

このように第1回セミナーから参加者には文字づくりの一日となった。

2018年7月、第2回

「本文書体の考え方・見方・作り方」

第2回セミナー講師は、(有)字游工房代表で書体設計士の鳥海修さん。

「読みやすい書体」とは何か、文字を作る細かい過程や、日本語の表記に用いる文字の歴史を辿りながら考える講義となった。この回でも書体の選択によって受け手の印象が変わることをあらためて学んだ。



写真2 松本文字塾展示の様子

また、第2回セミナー開催日に合わせて、前述の「文字塾」が6月に開催した「文字塾展 第6期」の展示を特別に「松本文字塾」と題して、3日間限定で、松本市に巡回していただいた。今回の展示はセミナー開催会場から徒歩圏内の書店とギャラリーの2店舗の協力により実現した。セミナー参加者はもちろん、思いがけず店舗を訪れた方にも、展示を通して“文字を作っている人がいる”ことを知ってもらう機会となった。

2018年11月、第3回

「組版における構造・構成・造形」

2018年シリーズの締めくくりとなった第3回セミナーの講師は、グラフィックデザイナーの白井敬尚さん。

デザインを感覚的なものと捉えている参加者も少なくなかったように思うが、白井さんの制作事例から伝わってくる緻密な分析の過程と、そこから生み出されたデザインを目の当たりにして、知識の

蓄積や鍛錬が必要だということ、あらためて考えさせられたのではなかっただろうか。

また、講義の冒頭で白井さんが語った、自身がデザインの仕事を始めた頃に勤務先の上司から明言された「タイポグラフィを知らないとデザインはできない」という言葉から、参加者はタイポグラフィの重要性を再認識できた回となった。

今後の活動について 地域とともに

2018年のセミナーシリーズは、文字を「読む人」—「作る人」—「使う人」という流れで講師を招聘し、参加者には概ねその内容に満足していただいた。企画した当初は、松本での開催で、第1回セミナーの定員である80人の参加者が集まるか懸念する声も多く聞かれたが、松本の街の気風であ

*TAKASHI, Shiroki
松本タイポグラフィ研究会 代表
長野県松本市里山辺1250
matsumoto.typography@gmail.com

れば受け入れられるはずという期待通り、開催した全3回のセミナーすべてで募集定員（第2回・第3回は100人）をオーバーする申込があり、会場は常に満席の状態であった。

これには、松本市とその近郊の書店やカフェなどが、セミナーの告知チラシ・ポスター設置に快く協力してくれたことや、SNSや口コミを通してセミナーの開催を応援してくれた方々の力が大きいと感じている。また、松本市内の書店数店には、開催日に合わせて講師の著作やタイポグラフィ関連書籍を店頭販売してもらえよう協力要請し、セミナーの開催とともに盛り上げていただいた。このような地域との連携協力は、松本という小さな街だからできることかもしれない。

2019年も引き続き「書物と活字」シリーズのセミナーを開催する予定となっている。「書物と活字」への関心は、読みやすく且つ美しいタイポグラフィへの関心や印刷技術などへの関心に繋がっていくと考えている。

セミナー開催を継続することで、地域とともに研究会も成長していきたい。

松本書体

研究会の長期的な目標・夢として、松本の気風や文化をイメージした独自の「松本らしい書体」を作りたいという想いを持っている。

今後は、その実現へと繋がる活動も始めていく予定だ。まずは、松本や信州の出版・印刷関連の流れを知ることからスタートする。例えば、みすず書房、筑摩書房、岩波書店などの信州人が興した出

版社の「人文」イメージから松本（信州）の書体を考え、さらに、松本の出身で「岡書院」と「梓書房」を経営した岡茂雄、その岡らが創設した「装釘同好会」と、その機関誌『書物と装釘』にも関心を持って調査をしていきたいと考えている。

また、それと並行する形で、既存の書体の精査も進め、書体や活字デザインに対する知識の向上をはかるとともにデザインとタイポグラフィ全般の研究にも注力していく。

- (1) 文字の食卓
<http://www.mojisyoku.jp/top.html>
- (2) 鳥海修さん主宰の書体製作を学ぶ塾。1年間かけて自分の仮名（平仮名・片仮名）をつくり、フォント化し、その成果を展示会で発表する。
- (3) 文字塾展 第六期
<http://mojijuku.jp/ex/06/>
- (4) 人形町ヴィジョンズ
<https://visions.jp/>

全国の紙器・段ボール箱業者のための総合情報誌

PACK & BOX

月刊バックアンドボックス

毎月15日
発行



別冊も
絶賛
販売
中

全紙器工連組員
2月刊行
予定

会社名鑑

2019-2020年度版

貼函図鑑

貼函の世界

株式会社 全国紙器広報センター

〒130-0005 東京都墨田区東駒形 1-16-1 東京紙器センタービル 5F

TEL.03-3624-9730 FAX.03-3624-9779

mail:info@packandbox.co.jp <http://www.packandbox.co.jp>